

グローバリゼーションと セルフ・スピリチュアリティ

小池 靖

I はじめに

グローバリゼーションとは、マスメディアで使われる限りにおいては、人、モノ、カネ、情報の流れが、国境の枠をこえて拡大してゆく様子のことである。そのような意味だけならば、以前の「国際化」といった用語とも近いものである。しかし、社会学など、社会科学でグローバリゼーションの語が使われる場合、それは1980年代のレーガン、サッチャー政権以降の動向を主に指す言葉であり、特に国際金融市場の形成によって、多国籍企業が国家以上の力を持つようになり、国内外における格差・不平等が拡大していく様子を指している。その場合、グローバリゼーションについては、はっきりと批判的な視線が投げかけられている。

こうしたグローバリゼーションが展開する状況下で、人間の精神、そして宗教がどのように変容を遂げているかといったことは、まだ充分には研究されていない。しかしグローバリゼーション拡大の時代に、世界的に見ても「スピリチュアリティ」の語が台頭してきたのは事実であろう。ヨガ、瞑想など、スピリチュアリティの世界では、しばしば異文化の心身技法が使われるなど、グローバル化した世界の多元主義化した状況の反映とも言える事態が展開している。

本章では以下、現代的スピリチュアリティとグローバリゼーションとの

関係を検討してゆく。まず、現代的スピリチュアリティの具体的な事例をいくつか検証する。その後、スピリチュアリティとグローバリゼーションをめぐる学問的な論争をレビューし、最後に、こうしたスピリチュアリティの動向と日本社会について短く考えてみたい。

II スピリチュアリティとは

現代日本においても、スピリチュアル／スピリチュアリティの語は、一定の市民権を得てきたように思われる。一般的拡大への大きなきっかけとなったのが、スピリチュアル・カウンセラー江原啓之の出演したいくつかのテレビ番組であることは事実だが、スピリチュアリティ概念が現在ほど注目されるようになるまでには、一定の歴史もあった。

スピリチュアリティには、霊性、個人的宗教性といった訳語が思い浮かぶ。そもそもスピリチュアリティの語が大きく注目されたきっかけは、1980年代アメリカの「ニューエイジ運動」の中で、「宗教は抑圧的で嫌いだが、スピリチュアリティの探求はおこないたい」といった言い方が増えたということだった。ニューエイジ運動とは、チャネリング、瞑想法、自己啓発セミナー、トランスパーソナル心理学、代替医療、サイババなど、主に非キリスト教的で雑多な霊的関心の総体である。それは、近代以降の様々なオルターナティブな思想・実践が、近代合理主義を乗り越えるゆるやかなムーブメントとしてとらえられたものである。

時は流れ、やがて「ニューエイジ」の語は衰退していった。当事者でさえ、ニューエイジ運動としてひとくくりにされることに違和感を表明するようになった。しかし「スピリチュアリティ」の語は、より広く使われてゆく。近年は、人文・社会科学などの学問分野や教育、さらにはターミナルケア・看護などの医療分野でも用いられ、関心を集めている。

スピリチュアリティとは、最大公約数的に言えば、超越的・超自然的な

力や存在に自己が影響を受けている感覚のことである。このように考えれば、宗教というものも、スピリチュアリティに関わる伝統的な社会制度であると言える。よって、(ニューエイジ時代には宗教が嫌悪されたものの)スピリチュアリティの議論で宗教を排除するのはそもそもおかしいことである。実際、たとえばカトリック教会は、スピリチュアリティという語をよく使ってきたし、日本のカトリックもそれに「靈性」の訳語をあててきた。

しかし近年では、宗教団体、大企業など、社会集団に対する全般的な不信感から、宗教抜きでスピリチュアリティを探求する人々も居る、ということである。言い換えれば、人間のスピリチュアルな行為・実践の中で、特に集団性が強く歴史的な基盤を持つものがいわゆる「宗教」ということになる。

現代的なスピリチュアリティに関わる情報・実践は、書籍、テレビ、映画、そしてインターネットなどのマスメディアを通じて拡散している。2000年代以降のスピリチュアルな商品文化の中で無視できないのが、ロンダ・バーン制作の映画『ザ・シークレット』¹⁾と、女性作家エリザベス・ギルバートのエッセイで映画化もされた『食べて、祈って、恋をして』である。²⁾

『ザ・シークレット』は、スピリチュアル系の本でよく語られている「引き寄せの法則(Law of Attraction)」について、そうした本の作家の証言や、その法則の再現映像で構成されたドキュメンタリー・タッチの映画である。良いことを思えば良いことが起きる、自己の思いが想念の波となって外界に影響を及ぼす、というのが「引き寄せの法則」の発想であり、1920年代ごろからアメリカの自己啓発書によく見られるようになったものである。『ザ・シークレット』DVDならびにその書籍版は、2007年にアメリカの人気トークショー「オプラ・ウィンフリー・ショー」で取り上げられたことをきっかけに、世界的なベストセラーとなった。司会者

オプラ・ウィンフリーは、スピリチュアル系、自己啓発系の作家・本を頻繁に番組で取り上げ、アメリカにおける現代的スピリチュアリティの大衆化にもっとも貢献したと考えられている人物である。

公式発表では、書籍版『ザ・シークレット』は、46カ国において2000万部売れたという。³⁾ 自己啓発書における普遍的なメッセージを、あらためてわかりやすいかたちで映像化し、普段はスピリチュアルに関心のない層にまで売ること成功した例だと見ることができる。

『食べて、祈って、恋をして』は、ニューヨーク在住の30代の女性作家が、自身の離婚をきっかけに自分探しに目覚め、イタリア、インド、バリ島の順で3カ月ずつ過ごした記録である。この書籍は、2010年にはジュリア・ロバーツ主演でハリウッド映画化された。題名のとおり、主人公はイタリアではグルメ体験を楽しみ、インドではヨガのグルのアシュラムで瞑想をして過ごし、バリ島では占い師のもとに通いながら、新たな恋をする。現代女性のスピリチュアルな自分探しのありようを、その贅沢さ、気軽さ、エゴイズムに至るまで、結果として見事に描いている作品である。『ザ・シークレット』も『食べて、祈って、恋をして』も、主に現代女性に向けて、スピリチュアルな世界の力を信じさせることによって、自己変革を促進しようとしている。今や人生観や世界観も、資本主義社会の中での商品となっているのである。

このように、今や現代的なスピリチュアリティは、明確にグローバルな広がりをもってマーケティングされているわけであるが、グローバリゼーションとスピリチュアリティとの関係について、現代のアカデミズムではどのようにとらえられているのであろうか。

III スピリチュアリティと グローバリゼーションについての論争

カレン・サラモンの「インサイド・アウトからグローバルへ向かう：職

場におけるスピリチュアル・グローバリズム」は、スピリチュアリティとグローバリゼーションとの関係について直接的に論じた先駆的研究のひとつである。⁴⁾

サラモンの分析によれば、現代では、ビジネス戦略、スピリチュアルなマネジメント・イデオロギー、グローバル・システムへの信念が融合しつつあり、職場がスピリチュアルに再定義される傾向にあるという。価値、意識変容、そしてスピリチュアリティといった語彙が、ビジネスセミナー、コンサルティングの世界にも入ってきている。そうした動向にインスピレーションを与えたものは、日本の生産システム、東洋宗教、西洋roman主義、そして心理学などであるという。

他の論者とも共通しているが、現代のスピリチュアルなマネジメント・イデオロギーの典型例は、スティーブン・コヴィーによる自己啓発書『7つの習慣』である。⁵⁾ 自己の靈性に着目したこのようなメソッドは、不安定な時代に、組織のアイデンティティを明確にさせ、メンバーの忠誠心を高める効果があり、公的領域・私的領域を再統合した、ホリスティックな企業文化への志向が見て取れるという。サラモンは次のようにまとめている。

グローバリズムとは、特権的で、脱領域化された消費文化についてのポストモダンな宇宙観なのである。その文脈では、私と公、スピリチュアルな確信と物質的消費、ツーリズムとミッション、家庭生活と仕事が融合している⁶⁾

そしてサラモンによれば、こうした論理は、ポール・ヒーラスのいう「ニューエイジ・セルフ・スピリチュアリティ」や、自己実現論にも近いものであるという。新時代のマネジメントの考え方もまたひとつの世界観を表しており、それは、旧来の公私分離した冷たい職業人のイメージでは

なく、仕事、プライベートな感情、自己実現のいずれもが調和をなしている状態を理想像としているかのようだ。

神学者のジョン・ドレインは、現代的スピリチュアリティに対してもっとも批判的な論者の一人であろう。ドレインは、スピリチュアリティについてもグローバリゼーションについても、最も広義にとらえている。スピリチュアリティのグローバリゼーションは、古くはキリスト教の世界宣教に始まるとし、霊性の異文化への移入は、帝国主義的な動機と常に結びついてきたと解釈している。

多くの現代的スピリチュアリティは、それがまさに軽蔑しているところの哲学によって駆り立てられているのであり、西洋の帝国主義的野望の片腕となってきた。それは今の時代においては、軍事的手段と言うよりもマーケティングとマスコミュニケーションによって遂行され、狭義の政治権力というよりも経済によって世界を支配するねらいをもったものだ。⁷⁾

商業的なスピリチュアリティへの批判の視座という点では、ドレインのこの解釈はジェレミー・カレットとリチャード・キングによる研究『スピリチュアリティを売るということ』にも通じるものがある。⁸⁾ カレットとキングによれば、昨今のスピリチュアリティの隆盛は、企業文化によって宗教性が乗っ取られてゆく嘆かわしい事態であるという。そして現代的スピリチュアリティは、ネオリベラルな時代にきわめて親和性が高いという。

現代社会において、スピリチュアリティの言説は、隠されたあいまいな仕方によってはあるが、ネオリベラリズムのイデオロギーを促進しているのである。実際、ビジネスや職業の世界におけるこの用語の

人気は、スピリチュアリティという信念が、企業資本主義における「人間中心の」安全な価値の一種として役立っているということを示している。それは自分らしさ、道徳、そして人間性といったオーラを提供することによって役立っており、[その一方で]ますます有害となってゆくネオリベラル政策の影響を仲裁しようとしているのだ。⁹⁾

彼らによれば、人間性心理学に始まる、セラピー文化の拡大も、現代スピリチュアリティ隆盛の大きな基盤となったという。心理学的なセラピーにおける意識変容、人材開発も、企業文化と広義のスピリチュアリティが交差する場であると解釈しているようだ。彼らは言う。

心理学は、市場が宗教性をスピリチュアリティという言葉によって囲い込む道を提供し、宗教がもっていた現状への脅威を政治的に除去してしまった。要するに、心理学（個人主義化）による宗教という領域への乗っ取りは、資本主義（企業主義）によるスピリチュアリティ乗っ取りのための基盤となったのだ。¹⁰⁾

何やら陰謀論的ですが、カレットとキングの議論をふまえれば、ネオリベラリズム社会の中の個人化、心理学の非政治性、そしてライフスタイルの商業化はすべて、昨今のスピリチュアリティの隆盛と結びついていることになる。それは、不安定な労働状況の中で、企業内におけるつながりの復活させることをも志向している。企業内で実践されるスピリチュアル系の研修は、新たな時代の思想改造なのだといった批判さえある。

しかし「オルターナティブ」には常に市場価値があるということもカレットとキングは示唆している。近年、世界各地のリゾートホテルで人気のスパ施設が、どこか東洋世界のスピリチュアルなイメージを演出していることは偶然ではないだろう。スピリチュアルなムーブメントの中には、

歴史的には対抗文化に由来するものも一部あったが、現代的スピリチュアリティは、それが本来対抗すべきはずの物質文明を結果として応援する結果となってしまうというのだ。彼らは、東洋宗教への関心も、異文化への新たな帝国主義的搾取であるとさえ述べている。

こうした議論の当然の帰結として、商品化されるスピリチュアリティは、消費への嗜癖を生み出すのみで、社会変革には結びつかず、現状維持を強化してしまうという。こうした論調は、新しい宗教現象への批判としては、以前からよく見られるものでもある。

さらに、メディア研究のジャンス・ペックも、『オブラの時代』の中で、ネオリベラリズムの時代の中で、オブラ・ウィンフリーが文化的アイコンになっていった背景を示唆している。¹¹⁾ ペックによれば、「引き寄せの法則」的な論理は、競争の盛んな時代の自己責任の論理と親和性が高いという。つまり、うまく行ったのはその人の気の持ちようのおかげであり、個人の成功や失敗も、社会制度や政府の責任ではないということになるからである。

ポピュラー文化研究のルス・ウィリアムズも、『食べて、祈って、恋をして』が、女性をネオリベラルでスピリチュアルな主体にしてしまう物語であるとして批判的な検証をおこなっている。¹²⁾

しかし、たとえば逆にポール・ヒーラスは、特にホリスティック教育、代替医療などに注目し、現代的スピリチュアリティにも社会的な意義があると主張している。¹³⁾ また、ビジネス研修の供給側の当事者による著作も、職場におけるスピリチュアリティを新時代のオルターナティブとしてきわめて好意的にとらえている。¹⁴⁾

以上、様々な立場の論者を見てきた。スピリチュアリティもグローバリゼーションも共にあいまいな概念であり、その2つを結びつけようとする議論も錯綜している。大まかに言えば、商業的なスピリチュアリティの消費を問題視する立場（言わばポピュラー文化批判）が一方の極にあり、そ

うではなく、近代文明で失われた個人の靈性をむしろ回復するべきであり、現代的スピリチュアリティにもそのための社会的な意義があるとする立場（言わばロマン主義）が他方の極にある。

メディアを通じてグローバルにマーケティングされるスピリチュアルな商品は、確かに世界的にはまだ歴史の浅いものであり、批判的見解が増えるのは致し方ないのかもしれない。しかし、一連の批判的論者らは、従来の宗教の社会変革機能を過大評価しているきらいもある。スピリチュアルな商品が、これまでの古今東西の様々な文化的アイテムと比べて常に、格別劣っていると決まったわけではないし、ポピュラー文化の文化的、政治的可能性についても、むしろ注視していく必要があるだろう。

IV 「職場におけるスピリチュアリティ」現象

サラモンの論にもあったように、過去15年ほどのスピリチュアリティについての議論の中で、宗教研究の枠を越えて多く語られるようになってきたのは「ワークプレイス・スピリチュアリティ」、すなわち職場におけるスピリチュアリティという視点である。

それは、1999年の『ビジネスウィーク』誌の特集「職場における宗教：アメリカ企業社会でのスピリチュアリティの拡大するプレゼンス」にもさかのぼることができる。¹⁵⁾ そもそもアメリカでは『ジーザス CEO [経営最高責任者]』といった書籍もあり¹⁶⁾、キリスト教信仰を職業生活に活かすといった考え方は長く存在していた。ネオリベラリズムが強化されていく2000年代以降、職場におけるスピリチュアリティは様々な広がりを見せ、ヨガ、瞑想、ビジョンクエスト、スエットロジック体験、火渡りの儀式、スピリチュアル系のセミナーなどが導入されるようになっていったという。そして、多文化主義のアメリカでは、特定の宗教色を薄めるためにも「スピリチュアリティ」の語が使われている。『ビジネスウィーク』の

記事では、次のような解説がある。

多くの企業やエグゼクティブたちは「世俗的スピリチュアリティ」だとよく言われている非教派的でハイブリッドなメッセージに注意深くこだわっている……それは多元主義的であり、かつ全ての世界宗教にも共通した道徳的メッセージに焦点をあてている。たとえば、自分よりも大きな何かにつながること。全ての実践や物事のつながりをリスペクトすること。そしてゴールデン・ルール [黄金律] を実践することである。しかしそれは同時に、表現の自由を尊重するものでもあり、人に信仰を押しつけることを避けてもいる。¹⁷⁾

当然、職場研修にこうしたメソッドが用いられることは新たな人間管理のツールなのではないかといった批判も、以前からおこなわれてきた。

スピリチュアリティも宗教も共に、信奉者に世界観の枠組みを提供し、時に人間を解放するが、逆に人間を管理することもある。現代的スピリチュアリティについての批判は、実はそれが過去に宗教がもっていた社会的ダイナミズムの再来であることを物語ってもいる。

ステフ・アウパーズとディック・ホウトマンは「ニューエイジ・セルフ・スピリチュアリティ」の要点を「自己の聖化」と「社会制度への全般的な懐疑心」にあるとした。しかしながら、そうしたスピリチュアリティにも社会的な意義があること、そしてスピリチュアリティを習得するのにも一定の社会的・共同体的文脈が不可欠であり、孤独で個人主義的なだけの営みでは必ずしもないことを示唆している。¹⁸⁾ 彼らもまた、職場におけるスピリチュアリティに注目して議論を進めている。

現在では「ニューエイジ」の語はもう必要ではなく、ビジネス書や、英米の職場で活用されるような霊性は単に「セルフ・スピリチュアリティ」と呼ぶのが相応しいだろう。「自己の聖化」と「社会制度への全般的な懐

疑心」だけが焦点化されてくると、それは何も宗教性に限ったことではなく、まさに現代人の人生観が、じぶん中心の、再帰的なものになってきていることの現れであるとの解釈も可能になってしまう。セルフ・スピリチュアリティには、単なるオーセンティシティ（本来の自分らしさ）を越えた面があるのかどうか、現在の議論でははっきりしていない。

職場におけるスピリチュアリティは、『ザ・シークレット』などの商品とは違い、より社会生活の場面に即した、場合によっては共同体的なものである。それはちょうど、グローバルでネオリベラルな時代において、新たなつながりをもたらしようとしている。そうであるのならば、闇雲に陰謀論的にとらえるのではなく、新たな時代の社会編成原理として、むしろ賢く、適度に活用していくことが求められるだろう。

V グローバル・スピリチュアリティと日本文化

翻って、日本ではどうであろうか。職場でのスピリチュアリティの議論における、日本の生産システムがそのひとつのルーツであるとの認識は、当の日本ではあまり共有されてはいない。しかし、社会学ではポストフォーダイズムとトヨタ方式とが類義語とされる場合もあるように、ポストモダン論と日本文化への注目は相性がよい面もある。つまり、日本は、奇妙な仕方、ポストモダンな現実を既に生きてきた、といった見方である。

しかし日本人の生活実態から見ると、日本の企業文化は、確かに「ホリスティック」なのかもしれないが、公私混同も強く、むしろ個人にとって抑圧的なものだと表象されてきたものでもある。

日本の企業文化については「カイシャ教」¹⁹⁾「カルト資本主義」²⁰⁾「家族的経営」などが長年議論されてきた。つまり、職場における人と人とのつながりが、最初から自明視されている日本では、「ワークプレイス・スピ

リチュアリティ」は、かえって流行する緊急性がないとも考えられる。言い換えれば、企業の社員研修のレベルで「スピリチュアリティ」という語彙を用いたりすることは、日本ではまださほど一般化しそうにない。また日本では、セルフ・スピリチュアリティの背後にある、ネオリベラルで個人主義的な主体というのも、欧米ほどは確立しておらず、政府や大企業などへの信頼が相対的にまだまだ高い社会でもある。

書籍、DVDなどでの商品としてのスピリチュアリティは、日本でもかなりの人気を博したが、グローバル化の厳しい人間状況を日本人が実感しているかという点、まだ未知数である。日本の職場におけるグローバル・スピリチュアリティの受容は、まだ始まったばかりであり、むしろ外資系ファンドの社員などのほうが、良くも悪くもネオリベラルな論理を内面化しているだろう。

しかし、スピリチュアリティをめぐる諸現象が、グローバル化する世界社会の新たな倫理の萌芽であることもまた間違いないことである。全てが経済効率で考えられ、競争的な社会を功利的に生き抜く姿勢は、どのような精神構造、エートスに支えられているのだろうか。カリフォルニアン・イデオロギー²¹⁾——コンピュータでつながった電腦世界が、新たなユートピアをもたらすという思想——も当然そのエートスに影響を与えているはずであろうし、「[SNSなどの] ソーシャルネットワーキングが、志を同じくする者たちとの何らかのつながりの感覚をもたらすサイバー・スピリチュアリティのようなものとして経験されうる」のかどうかということも、一考に値する問題であろう。²²⁾ こうした論点の詳細な検証は、今後の課題としたい。

社会の新たな相互連関の中で、どのようなモラルが立ち現れてくるのかということこそは、社会科学の根本命題である。それは現代であれば、グローバル化、スピリチュアリティ、インターネットの三者を抜きにしては考えられないだろう。

注

- 1) ロンダ・バーン (制作) 2008 『ザ・シークレット (DVD)』アウルズ・エージェンシー.
- 2) エリザベス・ギルバート 2009 『食べて、祈って、恋をして：女性が直面するあらゆること探求の書』武田ランダムハウスジャパン.
- 3) <http://thesecret.tv/creative-biography.html> 2012年10月5日アクセス.
- 4) Salamon, Karen Lisa Goldschmidt. 2001. "“Going Global from the Inside Out”: Spiritual Globalism in the Workplace.” In *New Age Religion and Globalization*, edited by Mikael Rothstein, Aarhus University Press, 150-172.
- 5) スティーブン・R・コヴィー 1996 『七つの習慣』キングベアー出版.
- 6) Salamon. *Ibid.*, 167.
- 7) Drane, John. 2007. "The Globalization of Spirituality." A paper delivered at a meeting of the Religion, Culture & Communication Group of the Tyndale Fellowship in Cambridge, 1.
- 8) Carrette, Jeremy, and Richard King. 2005. *Selling Spirituality: The Silent Takeover of Religion*. Routledge.
- 9) *Ibid.*, 134.
- 10) *Ibid.*, 79.
- 11) Peck, Janice. 2008. *The Age of Oprah: Cultural Icon for the Neoliberal Era*. Paradigm Publishers.
- 12) Williams, Ruth. 2011. "Eat, Pray, Love: Producing the Female Neoliberal Subject." *The Journal of Popular Culture*. DOI: 10.1111/j.1540-5931.2011.00870.x
- 13) Heelas, Paul. 2008. *Spiritualities of Life: New Age Romanticism and Consumptive Capitalism*. Blackwell Publishing.
- 14) Howard, Sue, and David Welbourn. 2004. *The Spirit at Work Phenomenon*. Azure.
- 15) http://www.businessweek.com/1999/99_44/b3653001.htm 2012年9月26日アクセス.
- 16) Jones, Laurie Beth. 1995. *Jesus, CEO: Using Ancient Wisdom for Visionary Leadership*. Hyperion.
- 17) http://www.businessweek.com/1999/99_44/b3653001.htm 2012年9月26日アクセス.
- 18) Aupers, Stef, and Dick Houtman. 2006. "Beyond the Spiritual Supermarket: The Social and Public Significance of New Age Spirituality." *Journal of Contemporary Religion*, 21:2, 201-222.

- 19) 中牧弘允 1992 『むかし大名、いまカイシャ——企業と宗教』淡交社.
- 20) 斎藤貴男 1997 『カルト資本主義——オカルトが支配する日本の企業社会』文藝春秋.
- 21) リチャード・バーブルック&アンディ・キャメロン 1998 「カリフォルニアン・イデオロギー」『10 + 1』13号, INAX 出版, 153-166.
- 22) “EDITORIAL: Cyber spirituality: Facebook, Twitter, and the adolescent quest for connection.” *International Journal of Children’s Spirituality*. Vol. 15, No. 4, November 2010, 291. <http://dx.doi.org/10.1080/1364436X.2010.539007> 2012年9月26日アクセス。